

中国植林協力の現場では (3) 山のかなたの自然林

【山は近くにあるけれど……】

大同市陽高県の民謡「高山高」にこういう一節がある。「山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし。十の年を重ねれば、九年は早（ひでり）で一年は大水…」。20年近くここに通ってきて、それが私の実感でもある。

山はあってもハゲ山ばかり。急な斜面まで畑が耕され、ずっと昔は森林があったといわれてもその姿を想像することができない。どんな樹木が育っていたのかももちろんわからない。最初のうちは、地元の政府が手がけているのと同じように山や黄土丘陵にマツを植えるだけだった。やがてマツのなかにグミ科やマメ科の灌木を混植するようになり、さらに貧しい村の小学校に果樹園をつくってアンズを植えるといったふうに、少しずつ工夫してきた。それでも、こんなことでいいのだろうかという不安が消えなかった。

1998年8月、霊丘県の技術者が興奮ぎみに話しはじめた。山の奥に自然林を発見したというのである。「こんなに大きな木もある」といって、一抱え以上のジュスチャーまで交える。それまで6年以上この地方を歩き回ってきただけに、自分の目で見ないことにはとても信じられない。

「遠いのか？」ときくと、「遠くない。2里だ」という答え。中国の1里は500mだから、たった1km。これからだって十分に往復できるというので、その足ででかけた。ところが着かない。その何倍も歩いたところで村の人にきくと、「すぐそこだ。2里だ」という。気をとりなおして、また歩きだす。

森林があるのはまちがいなさそうだ。途中で60kgものタキギを背負った農民に出会ったからだ。なかにナラ、シラカンバ、カエデなどの枝が混じっている。場所をきくと、2里先で、「あの山のもうひとつ向こうの山」とのこと。この日は諦めざるをえなかった。

この「2里」は決まり文句のあいさつ言葉のようなもので、実際の距離とは関係ないようだ。大同で

も都市部の人は「大里と小里があり、農村でつかわれているのは大里だ」とうそぶいている。日本でも「近くて遠きは田舎の道」というから、それと同じなのだろう。それとセットの「遠くて近き」は、「男女の仲」だそうだ。

【山奥にあった落葉広葉樹の森林】

そのあとも2回ほど空振りがつづいた。意を決して、弁当を準備し朝暗いうちからでかけることにした。公道近くの村にくるまを置き、あとは歩く。大昔の洪水のあとと思われる石の転がる谷底を渡り、山の急斜面を藪こぎし、片道4~5時間も歩いて到着したのが碣寺山(1768m)の稜線。歩きはじめの標高は900mだったから、高低差で900m近く登ったことになる。河北省との省境から5kmのところ。

そこにほんとうに森林があった！ 樹種は、リョウトウナラ（遼東櫟 *Quercus liaotungensis*）、マンシュウボダイジュ（糠椴 *Tilia mandschurica*）、ヤエガワカンバ（黒樺 *Betula dahurica*）、チョウセンヤマナラシ（山楊 *Populus dabidiana*）やカエデ属（元宝槭 *Acer truncatum*）などの落葉広葉樹に、数種類の灌木が混じっている。

林床には落ち葉が厚くたまり、その下にはまっ黒の森林土壌が顔をのぞかせる。これほど落ち葉がたまっているのは、日本でもめったにみることはない。気温が低くて乾燥しているぶん分解が遅いのだろう。こうやって土が肥えれば樹木の育ちはいっそうよくなるし、樹木が育てば落ち葉の量が増え、土壌の回復も早まるだろう。ある段階から良性の循環がはじまる。

2000年夏に10m×15mの調査枠を2つ設定し、毎木調査を実施した。その1つ、ナラが中心になっている調査枠には胸高直径3.0cm以上のリョウトウナラが30本で、樹高の平均は5.1m、最大のもののは8.5m、胸高直径の平均は9.7cm、最大のもののは25.5cmだった。カエデが9本混じっており、樹高は3.5mで、胸高直径の平均は6.2cm、最大のもののは8.0cmだった。

もう1つの杣の中心はマンシュウボダイジュで34本あり、平均樹高は5.5 m、最大のは9.0 mで、胸高直径の平均は7.4 cm、最大のは15.9 cmであった。そのほかにリョウトウナラが6本、カエデが15本、ヤエガワカンバが2本、チョウセンヤマナラシ1本があった。

さらに何本かの樹木の年輪を調べた結果、さまざまなことがわかった。1本のリョウトウナラ（樹齢39年、樹高8.0 m、胸高直径14.8 cm）の年ごとの直径増加量をみると、1960年から6年間は順調に伸びているのに、その後、横ばいから減少に転じ、1977年にはほとんど成長が止まった。1978年からまた直線的に増大し、1990年ごろには1年に12 mmも増加した。そのあと直径増加量はゆるやかに下降している。

これから推測できるのは、このナラが育ちはじめたころ周囲はオープンな環境にあったが、その後、周囲の樹木が茂って陽光をさえぎられ、成長が鈍化したようだ。1978年になって、ふたたび周囲がオープンになり、成長が回復した。下の村から農民が柴刈りにきて、燃料として持ち帰ったためと思われ、あちこちに半ば腐った切り株があるのもそれを裏付ける。そのときこのナラは伐採をまぬがれ、ふたたび陽光をあびて伸びはじめたのである。そして1978年を最後にこの山の破壊はなくなり、森林の再生がつづいてきたのである。

【マツの植林によって自然林が再生】

1978年を最後になぜ柴刈りがなくなったのか。そのナゾを解くカギがここまで登ってくる途中の山にあった。1960年前後、村に近いふもとにマンシュウクロマツ（油松 *Pinus tabulaeformis*）の植林がなされた。20年もたてばマツの下枝が燃料になる。村の近くで燃料をまかなえるなら、こんな山の上まで登ってくる人はいなくなる。人が通わなくなると、灌木などが茂って道もなくなる。油松を植えたことで、山のうえに落葉広葉樹の森林が自然に再生してきたのである。

なにかの植物を探していてなかなかみつからなくても、1本をみつけたとたんに周囲でつぎつぎにみつかることがよくある。この自然林も同じだった。碓寺山に出会うまで何年も出会わなかったが、碓寺山をみてからは霊丘県を中心にいくつもの自然林がみつかり、さらには大同市の北部でもいくつか再生



写真 大同市霊丘県の碓寺山（1768 m）山頂付近の自然林と立花吉茂代表

中の自然林が見つかった。

それらはせいぜい数ヘクタールから数十ヘクタールで、規模は小さく、たがいに孤立していて、構成する樹種もかなり異なっている。村から遠く道がない、近くにあった村が廃村になった、というような理由で成立するのは共通している。北向きの日陰斜面が中心になっているのも同じだ。

じつはこの自然林との出会いは偶然ではなかった。話は1994年にさかのぼる。緑の地球ネットワークの初期のメンバーは素人ばかりだった。専門家に加わってもらいたいと考え、白羽の矢を立てたのが現代表の立花吉茂さんだった。大阪市立大学理学部附属植物園を皮切りにいくつもの植物園建設にかわり、1990年に大阪で開かれた国際花と緑の博覧会の植物プロデューサーを務めた経験豊富な実務家である。「植物園をつくるくらい本気でやるのなら、自分も参加してもいい」というのが条件だった。植物園は世界でもっとも早くにできた研究所であり、それなしに緑化の筋道は立てられない、というのである。

自然環境と人の面からターゲットを霊丘県南部に絞り、現地の技術者に周囲の植生調査と候補地さがしを依頼したところ、みつかったのがあの自然林だったのである。

それらの自然林からそう遠くないところで、1999年4月から私たちは自然植物園の建設をはじめ、成果をあげつつあるが、それについては機会を改めたい。

（（特活）緑の地球ネットワーク 高見邦雄）